

●出遅れる企画主

「スタジオがわかりにくい場所にあるので、迷ったら電話してくださいね」と伝えておいた鉄巻とーます先生からの電話を華麗にスルーした十一月。

一分後に折り返し、「いまどちらに!？」と聞いたら「スタジオに来たけど誰もいない」と言われたのが、収録の始まりだった。

収録開始の三十分前に現地に入れば余裕だろうとタカをくくっており、最寄りのコンビニで差し入れジュースなどを買っていたせいですっかり出遅れてしまった。

急いでスタジオに駆け込む虎走。

エレベーターを降りるとカンバンが、あり、そこに案件名が書いてある。

ちなみになんて書いてあったかは全く覚えていない。

たぶん「ダミーヘッドマイク収録」とかそんな感じの記載だった気がする。

このスタジオには、収録ブースが二つある。

AルームとBルームという感じになっていて、Bルームの方が広い。

我々が使うのはBルームの方だ。

スタジオには待合室的な空間もあり、私が駆けこむと、とーます先生がすでに何者かと談笑している。

この若々しくて爽やかでめっちゃ声のいい青年こそ、サルーキを演じてくれる観世智顕さんである。

賢プロさんのホームページで写真を拝見したイメージしかなかったので「金髪の青年なんだろうな」と思っていたけれど、茶髪になっていたので一瞬「とーます先生、別の案件の人と急に仲良くなってるの? コミュ力半端くない?」と戦慄した。

普通にうちの案件の人だった。

漫画家さん、声優さんより後にスタジオ入りしてしまっただけで冷や冷やの滑り出しである。

●続々と集まるメンバー

とーます先生に作画資料としてスタジオの写真などを撮っていただいている間に、音響監督が到着する。

そしてなぜか賢プロのマネージャーさんがやってくる。

同人の現場にまでわざわざ顔を出してくれるとは……忙しいだろうに頭が下がるばかりである。

マネージャーさんと名刺交換などをしていると、廊下の方が一瞬ざわっとなる。

明らかに分かる「何者かがやってきた」感。

そう——本日の主役、小野友樹さんがいらっしやったのである！

ところで、収録には演者さんが入る収録ブースと、スタッフが入るコントロールブースがある。

演者さんは基本的に収録ブースに直行し、荷物を置き、収録中もマイクを通して音響監督とやり取りをするので、コントロールブースに顔を見せることはあまりない。

せいぜい挨拶くらい？　かな？

なので、頃合いを見計らい、音響監督が収録ブースに出向き、役の説明やら直前の修正点やらをお伝えする。

企画主もその音響監督について行って、軽くご挨拶をさせていただく。

当案件の企画主（私のことだ）は基本的に人見知りで、雑談やら役の説明やら挨拶やらがめちやくちや苦手のんだけど、小野さんがとんでもなくフレンドリーない方だったのでほとんどノーダメージでこのミッションをクリアすることができた。

常に笑顔。マジで常に笑顔。

明らかに慈愛の神の加護を受けている。

そしていよいよ収録が始まるのである！

●キャラ感の調整

ところで「キャラ感」というのは難しい。

この企画は鉄巻とーます先生のイラストから始まったけれど、そのキャラをもとに私が脚本を書いた結果、すでにとーます先生の抱く「キャラ感」と私の抱く「キャラ感」には超えられない壁が存在する。

一応とーます先生に「キャラ感どんなかんじ？」と聞いたら「もう台詞の時点で僕の想定してたキャラとは違うわい」と言われて「デスヨネ」となったので、私の思うキャラ感で進めていくことにした。

ファイブは人並み外れてマッチョな、ゴリゴリの戦闘職だ。

おそらくキャラデザを見て想起される声は、太くて重い、重厚感のある荒々しい声だと思う。

でも私はそういうキャラを書かなかった。

穏やかで、優しさと甘さがあって、適度に低くて心地よい。

でも怒つてるときは迫力があるとよい。

そういう声を想定して台詞を書いた。

本格的に収録が始まる前段階として、声優さんにテストでいくつか台詞を読んでもらう。その声を基準に「もつとこんなふうにしてほしい」とお伝えし、キャラクターの声ができるべく。

テストで小野さんが読んでくれた台詞は、重厚で強そうで、軍人然としており、正直「こんな低い声出るの!？」と驚いた。

キャラデザ的にはこの声でベストだった気がするけれど、作品のコンセプトも合わせて「もう少し穏やかで優しい声音をお願いします」とキャラ感を調整してもらった。

そして調整一回でバツチリとはめてくる小野友樹さん。あまりにも天才が過ぎる。踏んできた場数が違う。

キャラ感の調整が終わると、いよいよトラックごとに台詞を録音していく。

●耳元で聞こえるイケボ

当たり前だろと言えば当たり前なのだけど、ダミへ収録の時はコントロールブースにいる人間も全員ヘッドホンを装着する。

ダミーヘッドマイクは「自分がその場にいるかのような」音が収録できるマイクだ。

ヘッドホンやイヤホンを装着して音を聞くと、目の前や隣や背後にキャラクターが立って喋っているような感覚を味わえる。

そのため、音の距離感や立ち位置を確認するために、収録するときからヘッドホンを通して聞いた音を確認する必要があるのだ。

お分かりいただけるだろうか。

企画主は今回、女性向けにこの脚本を書き、「デープキス」やら「耳舐め」のシーンを盛り込んだ。

コントロールブースにいるスタッフは全員真面目な顔をして音声のチェックをしているが、全員小野友樹さんによるデープキス音と耳舐めリップ音をめちやくちや耳元で聞いているのである！

しかもトラックごとに、音響監督が「どうでしたか？」と感想を求めてくる。

どうもこうもないわ耳がくすぐったいわ！ などと叫んで逃げ出すわけにもいかないの
で、真面目に「この単語のイントネーションって今のであっていましたか？」とか「この台詞
ちよつと言いついてます」とかいふ修正をお願いする。

ついでに自分の収録の時間まで見学中の観世さんに「どうでした!？」と意見を聞いてみる。

声優さんにしかわからない何かがあるかもしれないから、せっかくなので聞いておこうと思っただけで、決して困らせる意図があったわけではないことをここに言い訳として添えておきたい。

●ベテラン過ぎて収録が1時間以上まく

「以上になります。ありがとうございましたー」

という音響監督の合図で、小野友樹さんパートの収録が終わりとなる。

1時間ちよっとの作品なので、リテイクしつつ説明しつつ、大体四時間くらいかかるのが普通らしいのだけど、二時間半くらいでさくつと終わってしまった。

つまりほぼぼノーリテイク。

今回はたまたま観世さんが頭から見学に入っていたので、タイムロスゼロで観世さんの収録を始めることができた。

観世さんはダミへ収録初挑戦だ。

一度ヘッドホンを装着した状態でしゃべってもらい、「自分の声がどう聞こえるか」を確認していただく。

ところで今回、小野さんにはテキストインタビュースサイン色紙をお願いしてあった。色紙をさっと書き上げたあと、「記憶が新鮮なうちに」と待合室でテキストインタビュースをぼちぼちスマホに入力してくださっていたのだが――。

観世さんの音声チェックが終わり、収録を始めるぞと言うところで、ずっと小野さんがコントロールブースに入ってきた。

「サルーキの見学させてもらいますね！」

そして観世さんの収録が始まるのである。

●ほんとに君は初めてなのか？

ダミへ収録が初めてという観世さん。

正直波乱万丈な収録になることを覚悟していたのだけれど、結論だけ先に行ってしまうええまゐりで難航しなかった。

小野さん演じるファイブと同じく、こちらもキャラ感の調整から入る。

2〜3回調整しただけでよい感じになる。

マイクの距離感とかも全然違和感がない。

違和感がないどころか、めちやくちや上手い。

なんだこれは……どうなってるんだこの色気は……。

脚本を読めばお分かりの通りだけれども、サル―キはヒロインに対してちよつと怖いセリフを言うシーンがある。

まったく色っぽいシーンじゃないのに「悪役がヒロインに迫る色気」がすごい。

作家としての語彙力が消失するレベル。

動揺してるのは私だけかとおもったら、とーます先生も「今のめちやくちやエロくなかった？」となっていたので満場一致でどえっち。

虎走かけるは健全作品にひそむ色気が大好きなので観世さんに千点加点了！

●別日収録の丸中さん

ところでこの作品、最初は小野友樹さん一人の出演を予定していた。

けれど「もう一人くらいいた方が会話の幅が広がってよいな」と思ってた観世さんに参加していただいた。

ついでに観世さんにモブをやってもらう予定だったけれど、音響監督判断によって「父親にも声あつた方がいいし、電話モブも観世さんじゃない方がいいです」という事になり、賢プロダクションの丸中さんにヒロインの父と電話音声をやっていただくことになった。

これが決まったのは小野さん&観世さんの収録が終わった後。

なので一度フィックス原稿を書きなおした。

とはいえ「まあ、台詞2個くらい書き足すだけでいいかあ」と思っていたのだけれど、丸中さんがツイッターで「初めてのシチュボ参加です！」と宣伝してくれているのを見た私の胸中に「台詞三つじゃ忍びないな……」という気持ちが発生し、もう一回フィックス原稿を書きなおす事となる。

実はもともと「もーちよい親父の台詞あつた方がいいかなあ」と思っていたのだけれど、でも小野さんの台詞が始まる前にあんまりサブキャラの台詞が続いてもなあ……という葛藤もありで悩んでいたところだった。

そして台詞を足した結果がどうだったかと言うと、なんということでしょう、想定以上にバッチリだったのである。

普段は洋画の吹き替え仕事が多いと言う丸中さん。

なるほどもちやくちや声が渋い。そして実に悪役っぽい。「マフィアのボスっぽい声の人お願いします」といって丸中さんが来たら誰も文句言わないと思う。

●あとは効果音を付けるだけ

ボイスの収録が終わったら、次はこれに効果音を付ける作業が待っている。

プロの音響効果さんが、足音や衣擦れやドアの開閉の音などをつけてくれると、ボイスドラマの完成だ。

ちなみにこの収録レポを書いている段階では、まだ効果音がどんな感じになっているか企画主も分かっていない。

でもきつとめっちゃいい感じになっていると思う。

この作品が少しでも皆さんの心をドキドキさせられることを祈っている。